

マリ南西部における子どもの集会に関する研究

平成 21 年入学

参加したフィールドスクール：カメルーン・フィールドスクール

調査地（調査国）：マリ共和国

今中亮介

キーワード：マリ，子ども，トン，社会化，社会変化

自分の研究テーマについて

調査地を含むマンデ系の社会では、トン（集会 *ton*）が社会の統合に重要な役割を果たしてきた。トンはカースト制などにより複雑に成層化された地域住民を横断的に組織し、集会における話し合いにおいて公的な事柄について決定してきた。その民主主義的な性格から、古バンバラ王国や独立後 1968 年までの社会主義政権など、しばしば中央権力によって政治利用されてきた歴史がある。

独立後の急速な近代化とイスラーム化の影響により、カースト制や年齢階層、割礼など子どもをめぐる在来の社会制度が形骸化し、新たに学校制度が導入される中、子どものトンは 68 年に社会主義政権が倒れて以降急増した。また、現在の子どものトンは、トンのもつ民主主義的な性格と柔軟な組織構造により、子ども自らが在来の枠組みを参照しつつも再解釈した結果であると考えられ、その活動内容は近代化とイスラーム化に対応している。

本研究では、マリ農村部において現在子どもが子どものトンとどのように関わっているのかについて考察するとともに、トンの変遷について通時的分析を行う。これらの分析を通して、子どもをめぐる社会変化の動態を捉えるとともに、子どもがいかにか「解釈の再生産」（corsaro 2004）としての社会化を果たしているのかについて描きたい。

フィールドスクールで得られた知見について

フィールドワークは身体から研究対象に入り込み、そこに住む人々と生活をともにするという意味で調査という「公」と生活という「私」を分けられるものではない。しかし、前者の方法論は大学の講義でもある程度まで教えられるが、後者については話の横道ないし雑談として触れられるにすぎず、聞き手としての私は馴染みのない世界のこととして想像をめぐらすだけである。それを感じ、学ぶには経験の共有が必要なのではないだろうか。

私は調査地マリにおいて一人で調査を行っている。そこでは、新米のフィールドワーカーとして調査はもちろんのこと、そこに住む人びととの意思疎通、寝食に至るまで手探りの状態である。しかし、この度のフィールドスクールではプロのフィールドワーカーである先生方や先輩方と同行することができた。同スクール参加者はフィールド講義だけでなく、寝食や移動などほとんどの時間を共に過ごす。そこでは、先輩フィールドワーカーが日常的で些細な事柄に対してどのような見方をし、振舞っているのかについて観察し、話を聞くことができた。例えば、移動中に車窓から何を見ているのか、現地の人びととどのように意思疎通ないし駆け引きを行っているのか、頻発するアクシデントにどのように対処しているかなどである。このように、この度のフィールドスクールでは調査というよりも、もっと生活

に近い領域における知見について多くを得られた。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

フィールドスクール中に路上の物売りの子どもが流暢な仏語を使っていることに驚いた。カメルーンはマリと同じく仏語（西部は英語）が公用語である。マリでは、調査村周辺はもちろんのこと、首都バマコでも物売りなどのインフォーマルセクターにおけるやりとりは、現地のリングフランカであるバンバラ語で行われる。そんな中、物売りの子どもに仏語でやりとりをしようとしても通じないことが多いからだ。

カメルーンで長く調査をしている方の話を聞くと、南部では7歳ぐらいになると子どもの多くが仏語を喋ることができるそうだ。その理由のひとつとして、カメルーン南部では比較的小規模の民族集団が多く、マリのバンバラ族のような規模が大きく支配的な民族集団が存在しないということがある。その結果、民族集団間のコミュニケーションツールとして外来の言葉である仏語が用いられているのである。

マリの識字率と小学校修了率は共にカメルーンの半分以下であり、数字の上では極めて低い教育水準にあるといえる。同スクール中の売り子との出会いから、カメルーンの教育水準が高いという言説について実感させられつつも、こうした背景を考えると単純に教育水準の比較などはできないし、「教育」などの子どもをめぐる社会制度の分析は地域の文脈に沿った形で行われなければならないと再認識させられた。



【マリ】子どものトン *sadam* の共同労働



【マリ】調査村にある公立学校



【カメルーン】バカ・ピグミーのダンス